
式神天狗

岡 竜矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

式神天狗

【Nコード】

N2539K

【作者名】

岡 竜矢

【あらすじ】

遙か昔より柏樹の地を治める陰陽師【式部】一族。その式部には、五百年もの昔から、式神となっている天狗がいた。天津あまつという名の天狗は、式部家次期当主 式部熾あし亜とともに、五百年経った現在においても柏樹の地を守り続けている。しかし、そんな彼らに、今、最悪の災いが迫りくる。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

プロローグ

月明かりが射さない薄暗い山中を獅子丸ししまるは駆け抜ける。

獅子丸の姿は齡十二を数える子供である。

だが、彼は人間でない。ましてや、そこらの力のない妖魔悪鬼などでもない。

山神。

それが獅子丸の正体である。

五百年前に先代の山神からその座を譲り受けた獅子丸は、この五百年間、多くの災いから山を守ってきた。そんな彼が今、齒を食いしぼりながら全速力で山頂へと向かっていた。

変化は唐突だった。

突然、山が謎の妖気に包まれ、山中を照らしていた月の光は瞬く間に遮断された。

今まで山に寄りつくことがなかった魑魅魍魎が山に現れ、山に棲みついてきた動物たちはその姿を消した。

いち早く事態の深刻さに気付いた獅子丸は、山を覆った妖気が噴出した場所……すなわち山頂へと向かう。

山頂には、数千年の昔からこの山を守る神木がある。

もし、その神木に何かあれば、考えうる限り最悪の事態になりかねない。

「っ！ これは……」

ようやく山頂へと辿り着いた獅子丸は目の前に広がった光景に絶

句する。

神木の力により、山頂に美しく咲き誇っていた花々は妖氣の力でことごとく枯れ果てていた。

そして、中央の神木は……

「そんな、神木が……」

無残にも、真つ二つに裂かれ地に伏していた。

「あらあら、誰が来たかと思えば……獅子丸様ではありませんか」

どこからともなく艶やかな声が聞こえてくる。同時に、見る影もなくなつた神木の陰から一つの影が現れた。

妖氣が充満し、姿を見ることはできないが獅子丸はその声に聞き覚えがあつた。

「その声は……木霊？」

「はい、そうでございます」

木霊こたまと呼ばれた影は、くすくすつ、と笑いながら答える。

「木霊、いったい何があつたんだい？ どうして」

「どうしてこんなことが起きたのか」

獅子丸の言葉を木霊が代わりに紡ぐ。

すると木霊は再び、くすくすつ、と笑う。

「答えは簡単ですよ、獅子丸様。全て私がやりました」
「なんだって？」

獅子丸は、木霊が何を言っているのか理解できなかった。

「お分かりになりませんか？ この神木を倒したのも、この山に妖気を充満させたのも私だと申しておるのです」

まるで、どうしてそんな簡単なことが分からないのか、と言っているような口振りで木霊は答える。

獅子丸は、木霊が悪い冗談を言っていると思った。

当たり前だ。彼女はこの五百年間、自分を支えてくれた側近のような存在だったのだから。

「獅子丸様。これは冗談でも、ましてや夢でもございませぬよ」

獅子丸の思いを踏みにじるかのように、木霊が冷たく言い放つ。

その冗談とは思えない雰囲気に、獅子丸は彼女の言っていることは真実だと認めざる得なかった。

「……………どうやら、本当のようだね。でも、木霊、お前にはこれほどの事を起こす力はなかったはずだよ。いったいどんな手を……………」

そう言った獅子丸の視線は、木霊ではなく、地に伏した神木に向けられた。

そこで獅子丸はある予想に辿り着く。

「まさか木霊、お前……………」

「ええ、その“まさか”です、獅子丸様。とても……………とても美味しゅうございました」

木霊は、獅子丸の心を読んだかのように答える。

「木霊、それがどういう意味か分かっているのかい？」

「ええ、十分に承知しておりますとも」

「……そうかい」

獅子丸から神気が発せられる。

発せられた神気は、山頂の妖気を一気に払拭した。

視界を覆う妖気が晴れ、木霊の姿がはっきりと現れる。

木霊は獅子丸の……山神の怒りに触れてしまった。しかし、木霊は強力な神気を目の当たりにしても一歩も怖じける気配を見せなかった。

「それどころか、

「この場の妖気を一瞬で掻き消すなんて、さすがは獅子丸様。まがりなりに“あの方”から山神の座を譲ってもらっただけのことはありますね」

神である獅子丸を、まるで格下にみているような物腰で話しかけてくる。

彼女は獅子丸を挑発しているつもりなのだろう。だが、幾千の災いから山を守り抜いてきた獅子丸にとって、その挑発は無意味以外の何物でもなかった。

「言い残したいことはそれだけかい？」

獅子丸は、どこからともなく取り出した薙刀を構え、木霊を見据える。

「木霊。お前はこの山において最大にして最悪の【禁】を犯したんだ。よって、オイラはお前を滅するよ」

「できるのですか？ あなた如きに……」

「自信满满だね。まるでオイラじゃお前を殺せないみたいじゃないか」

「そう申しているのですよ」

「……そうかい」

獅子丸は、薙刀を持つ両手に力を入れる。

「……木霊」

「ふふっ、なんでしょう？」

獅子丸は息を大きく吸い込む。

そして、

「“アレ”を喰らったからといって、調子に乗るな！」

怒号と共に獅子丸が大地を蹴り、土埃が舞う。

木霊が土埃が舞ったことを認識した時には、獅子丸は彼女の目の前で薙刀を振り上げていた。

「終わりだ」

煌めく白刃が木霊めがけて容赦なく振り下ろされる。

圧倒的な力。

圧倒的な威圧感。

本来ならば、木霊は指一本動かすどころか、表情一つ変える暇などなかった。

獅子丸とて、それほどの余裕を与える慈悲を施さなかった。

しかし、

「その通りです、獅子丸様」

木霊は、笑う。

圧倒的な力を前に。

確実に迫る死を目の前に。

敵かに、笑う。

「終わりにしましょう。そして、“あの方”をもう一度」

それが、獅子丸が最後に聞いた木霊の言葉だった。

プロローグ（後書き）

……え、プロローグで主人公どころか、ヒロインすら登場しませんでした。一話からはちゃんと登場しますんで、読んでくださった方、生暖かい目で見守ってください。あと、ダメ出し、感想があれば、ぜひお願いします。

1、陰陽師と天狗

柏樹市は、今日も今日とて、照り付ける太陽が夏の暑さを一段と厳しくしていた。

そんな、平均気温三十四度を超える炎天下の中、

「天津！ ちょっと下りてきなさい！」

朝っぱらから、暑さを吹き飛ばすかのような怒声が柏樹市の空に轟く。

怒声を聞いた柏樹市の住民は、丘の上にある屋敷を見て、一同に「ああ、またか」と思う。

住民らが目を向けた屋敷には、千年もの昔からこの地を治める一族が住んでいた。

一般的に【陰陽師】と呼ばれるその一族、名を【式部】。そして先程の怒声の主こそ、式部家次期当主、式部熾亜。その人である。

熾亜は目を尖らせ、父親譲りの青い瞳で屋敷の屋根の一点を鋭く睨みつける。

そこには、山伏姿の青年が小鳥と戯れていた。

「ちょっと聞いているの！ 天津！」

熾亜の怒声が再び空に轟く。

「なんじゃ、熾亜。さっきからうるさいぞ」

二度目にして、ようやく青年……天津が文句を言いながら熾亜の方を向いた。しかし、相変わらず屋根から降りようとしない。ただひたすら、小鳥と戯れている。

「なんじゃ、じゃない！ 言いたいことがあるからちょっと下りてきなさい！」

湧き上がる怒りを抑え、熾亜は天津に【命令】する。

しかし天津は頭を掻きながら、

「面倒だの」

熾亜の【命令】を無視する。

ブチッ。

直後、熾亜の中で何かが切れた。

「そう、あたしの言うことが聞けないってわけ……」

言っと、熾亜は制服の懐から長方形の黒い紙を三枚取り出す。

全体が黒に染まった紙の中心には、白いインクのようなもので五芒星が描かれ、その下には【火】という文字が書かれている。

熾亜が取り出したのは【呪符】だった。しかも、その中でも最大の威力を持つ【火】の呪符。そこいらの霊や雑魚の妖ならば、一瞬で灰にできる代物だ。

「いいから……」

熾亜が呪符に自身の靈気を注ぎ込む。

「さっさと……」

すると、呪符に描かれた五芒星と火の文字が赤く染まる。
直後、

「下りてこい！ このバカ天狗！」

熾亜は、暴言と三枚の呪符を天津へと投げ放つ。
放たれた呪符は、熾亜の手から離れた途端、火球となり天津を襲う。

天津にくつついていた小鳥たちは、それを危険と判断し、一斉に逃げ出した。

天津は、逃げ行く小鳥たちを残念そうに見つめ、

「やれやれ……相変わらず短気じゃの」

疲れた溜息を吐く。

同時に、腰に差していた鉄扇【百花】を抜き開き、

「ほれ」

向かってくる火球に向けて、鉄扇を軽く扇ぐ。
すると、

「へっ!?!」

火球はその軌道を変え、逆方向へと飛んでいく。
つまり、

「ちよ、ま」

ズドンッ！

熾亜が何かを言い終える前に火球が熾亜に着弾。彼女が立っていた場所は、黒煙で覆われた。

その光景に天津は、鉄扇で口元を隠し、

「ふむ、ちとやり過ぎたかの？」

と、一言。

文字通り、かかる火の粉を振り払ったとはいえ、さすがに三つすべてを熾亜に返してしたのはまずかった。

「せめて一つぐらいにしとくべき」

「何すんのよ！ このバカ天狗！」

突然、黒煙の先から小石が天津に向かって飛んできた。

天津は、それを容易くキャッチすると、

「おお」

「おお、じゃない！」

煙が晴れた途端、感嘆の声を上げる天津に、熾亜は怒りの眼をぶつける。

熾亜の周囲には、薄い水の膜が張られていた。

「ほう、咄嗟に水の【護符】を使い、火を防いだか。少しは成長し
とるようじゃな。感心、感心」

「うっさい！ いきなり返すなんて危ないじゃない！」

「危ないも何も、元はお主の術ではないか。ちゃんと制御すれば、
あれぐらいのそよ風で返されることはなかったはずじゃが？」
「ぐっ……」

自身の未熟さを指摘され、押し黙る熾亜。

「そもそも、わしが火を返さなんたら、今頃屋敷は炎に包まれとっ
たな」

「うぐぐっ……」

返す言葉もない熾亜は、ただ、唸ることしかできなかった。

「まったく、お主はもう十七だというのに、これしきのことて我を
忘れるとは……まったくもって不甲斐ない。少しは中身も成長して
ほしいもの……ん？ どうしたのじゃ、熾亜。そんなに肩を震わせ
て」

「うっ……」

「うっ……」

「うるさあああああい！！！！」

逆ギレした熾亜の叫びが柏樹の空に響きわたった。

今日も柏樹市では、陰陽師と天狗が元気に朝を迎えていた。

2、天狗様の好物

「あらあら、熾亜ちゃんに天狗様は今日も元気ですねえ」

熾亜が天津に再び呪符を投げ放とうとした時、後ろから、やんわりとした女性の声が聞こえてきた。後ろを振り返ると、そこには、小箱を持った、とても人が好さそうな老婆が微笑みながら立っていた。

熾亜は、その老婆に見覚えがあった。

やまだ やすえ
山田泰江。式部家のお隣さんで、よく天津にお供え物を持ってくる女性だ。

泰江を見た途端、熾亜は手に持っていた呪符を急いで隠す。

「え、あ、泰江さん。お、おはようございます」

「ええ、おはよう、熾亜ちゃん」

慌てる熾亜に対して、泰江は、やんわりと挨拶を返すと、

「天狗様もおはようございます」

天津に向かって深々とお辞儀をする。

ちなみに、天津が式部家の式神であり、千年以上も生きている妖ということは、柏樹市の住人たちにとって周知の事実である。

住民の中には、気味悪がる者もいる。が、そういった者は、住民の中でも少数派であり、ほとんどの住民は、天津を柏樹の守り神のように見ている。泰江がよく天津にお供え物を持ってくるのも、そのためだ。

「おお、泰江か。今日も元気そうじゃな」

「はい、お陰様で主人共々、病気もなく元気にやらせて頂いております」

言っと、泰江は、再び深々とお辞儀をする。まるで、神を拝むかのように。

それに天津は、困ったように肩を竦める。

「泰江よ、そう拝むな。元気なのは、お主らが日々、健康に生きる努力をしておるからじゃ。わしは何もしておらん」

「そうです。あんなやつに拜んでも、ご利益なんて一つもないんですから、拜むだけ損ですよ」

天津の言葉に、熾亜も同意する。だが、彼女の言葉の端々には、かなり棘があった。

だが、泰江は、やんわりとした微笑みを変えることなく、

「いえ、私どもが健康で暮らせるのも、天狗様が柏樹を守ってくれているおかげなのです。ですから、こうして、拜ませただきま

す」

「ふむ、まあ、それでお主の気が済むのなら、わしは何も言わん。
……ところで泰江。わしに何か用でもあったのではないのか？」

「ええ、実は……」

泰江は、手に持っていた小箱を開ける。そこには、泰江特製のおはぎが、隙間なく詰め込まれていた。

「昨日、主人の邦英くにひでが天狗様のお世話になったと聞きまして、そのお礼として、これをお持ちしました」

「なんと!」

小箱に詰められたおはぎを見るなり、天津は、鉄扇を腰に差し直し、すぐさま屋根から飛び下りる。

見事、泰江の前に着地した天津は、好物を目の前にした子供の如く目を光らせ、

「こ、このおはぎは、わしが全部食ってもいいのかなの？」

「ええ、そのためにお作りしたのです。お好きなだけお食べください」

「おお、泰江よ。礼を言うぞ！」

言つと、天津は小箱を受け取り、おはぎを頬張り始めた。

天津のあまりの失礼さに、熾亜は顔を真っ赤にして、

「ちよつと天津！ はしたないわよ！」

「別に良いではないか。熾亜も食うか？ 美味しいぞ」

「いるか！」

怒鳴る熾亜をよそに、天津は再びおはぎを口に入れる。

「ところで熾亜よ。お主もわしに何か用があつたのではないのか？」

その言葉に、熾亜も当初の目的を思い出す。

「そうだった。天津、あんた昨日どこほつつき歩いてたのよ！ お

かげで昨日の妖退治、あたし一人で行くことになったのよ！」

「なんじゃ、そんなことか」

「そんなこと!？」

天津の言葉に、熾亜は絶句する。

「なに、公民館で邦英らと将棋を打つとっただけじゃ。……む、熾
亜、顔が般若になりかけておるぞ」

見ると、熾亜が先程とは比にならないほどの形相で天津を睨みつ
けている。般若化まで、あと一歩といったところか。

そのうち、鬼神を具現化して呼び出すこともできるのではないか、
と天津は思う。

「別にいいではないか。それほど強い妖ではなかったのじゃろ？」

天津の言うとおり、昨日、熾亜が退治した妖は、それこそ、そこ
いらの怨霊がただ実体化した程度の弱い妖だった。よって、熾亜一
人で十分な相手だったと言える。

「でも、万が一ってこともあるじゃない！」

「万が一だろうが、億が一だろうが、不測の事態を対処するのが一
流の陰陽師だと思うのが」

「ぐっ……」

正論である。反論できない。

何か言い返そうと考えるが、まったく思いつかない。

「あらあら、お二人とも本当に仲がよろしいのですねえ」

近くでは、泰江がのほほんと、熾亜と天津のやりとりを見ていた。
すると、泰江は、あることに気が付く。

「あら、そういえば、熾亜ちゃん。どうして、制服を着ているの？」
「えっ!?!」

そう、泰江が気付いたのは、熾亜が制服姿だったということだ。今は、七月の下旬。つまり、夏休みの真っ只中であり、高校生である熾亜も例外ではないはず。それなのに、彼女は制服を着ている。それが泰江にとって、不思議でならなかった。最初は、部活動のためかと思っただが、以前、彼女は部活動には入っていないと公言していた。

「え、あ、これは、その……」

泰江の問いに、熾亜は言葉を詰まらせる。その額からは、びっしりと汗がにじみ出る。

最終的に、笑ってごまかそうとした熾亜だったが、見かねた天津が横から、

「なんでも、夏休み前のテストが著しく悪かったんで、夏季補習に招待されたそうじゃ」

「っ！ 天津！」

「本当の事じゃろが」

言っと、天津は、おはぎを口に入れ、そっぽを向く。

「えっと、違うんですよ。これは、そう、偶々なんです。偶々成績が悪くって、夏季補習に招待されただけなんです！」

熾亜は、天津を一瞬だけ鋭く睨みつけると、泰江の方を向き、必死に弁解を始める。泰江は、こんなことを広める人間ではないと信じている。が、最悪、これが外にバレれば、

「奥さん、聞きました？ 式部さんところの娘さん。テストの成績が悪くて、補習に招待されたんですって」

「まあ、陰陽師だかなんだか知りませんが、おつむは弱いんですねえ」

『おほほほほっ』

なんてことになりかねない。

これでは、恥ずかしくて外も歩けない。

だからこそ、熾亜は、必死に言い訳を泰江にし続ける。

「まあ、そうなの？」

「そうなんです！ 本当に、偶々、偶然の産物なんです！」

その甲斐あって、泰江も熾亜の言葉を鵜呑みにしかけた。

しかし、

「なるほど、熾亜の中では、二年……いや、中学を数えれば六年連続の夏季補習招待でも偶々なのじゃな」

熾亜の努力は、隣でおはぎを食べていた天狗によって、すべて塵と消える。

「……ねえ、天津？」

「なんじゃ？」

「喧嘩なら買っつわよ」

額に井の字を浮かべながら、熾亜は静かに、言う。

対し、天津は、また新しいおはぎを手に取り、

「別に構わんが……よいのか？ そろそろ行かんと遅刻じゃぞ？」

「へっ？ ……げっ！？」

熾亜は、携帯を取り出し、時間を確認する。

時刻は、九時。授業の開始は、九時半。学校までの所要時間、最速で三十分。完全に遅刻の一手手前である。

「や、やばっ！ 泰江さん、じゃあ、あたしもう行きます！」

「ええ、がんばってね」

熾亜は、泰江に一礼した後、天津を睨みつけ、

「天津、帰ったら覚えてなさいよ」

三流悪党の如き捨て台詞を言って、即座に屋敷を出て行った。その様子には、天津は、

「やれやれ、やはり中身も成長してほしいものじゃ」

静かに溜息を吐くと、また一つ、おはぎを口に入れた。

+++++

……ちなみに。

数日前、柏樹市のとある商店街では、

「魚屋さん、こんにちは〜」

「おう、式部んとこの奥さん！ 珍しいねえ、今日はどうしたんだい？」

「実はね〜、うちの熾亜ちゃんがまた夏季補習に招待されちゃったの。だから、何か頭に良い食べ物ください」

「ありゃ、またかい。今年こそはと思ってたんだがね〜。じゃあ、魚の目玉でも持ってくかい？ 頭が良くなるらしいよ」

「あら、そんなの？　じゃあ、それ貰うわ」
「まいどー」

このようなやり取りが行われ、

「おい、魚屋の」

「おう、どうした八百屋の」

「どうやら、今年もダメだったみたいだな」

「そのようだ。まあ、熾亜ちゃんも来年あたりは頑張ってくれらだろつよ」

熾亜の与り知らぬところで、既に、彼女の頭の悪さは露見されていた。

何を隠そう、自身の母親によって。

2、天狗様の好物（後書き）

天狗様はおはぎがお好き。この路線で行こうと思っています。

ちなみに、熾亜のお母様は、俗に言う天然おっとり系です。

そして、基本、柏樹の住民の皆様の半分は、優しさでできています。

3、予兆

「馳走になったな、泰江。相変わらず美味かったぞ」

天津は、十数個あったおはぎをすべて平らげ、礼を言って、空になった小箱を泰江に返す。

泰江は、小箱を受け取ると、嬉しそうに微笑む。

「まあ、そう言って頂けると、作った甲斐がありましたわ」

言つと、泰江は、熾亜が出て行った屋敷の門を見やり、

「でも、天狗様、よかったですか？ 熾亜ちゃんにあんな嘘を吐いて……」

「む、なんのことじゃ？」

突然の泰江の発現に、天津は咄嗟に目を彼女から背ける。

「主人から聞きましたよ。天狗様、公民館に来たのは、熾亜ちゃんのお仕事が無事終わったからだって」

「……邦英め、黙っておれと言っただがのう」

隣に住む好々爺の顔を思い浮かべながら、天津は恨めしげに、言う。

実は、昨日の妖退治、天津も実際に行っていた。熾亜に気付かれぬようこっそりと。そして、熾亜が妖を退治するまで、しっかりと見守っていたのである。

「まあ、そろそろ熾亜にはわしに頼らずに仕事をしてほしいの。

今回はその練習みたいなもんじゃ。言っておくが熾亜には内緒じゃぞ。あやつのもじじゃ、知ったらまた怒るからの」
「ふふ、わかりました」

泰江が言うと、天津は満足そうに頷く。

「うむ、ところで泰江。お主、今日、柏樹山に登山へ行くそうじゃな？」

「え、ええ、そうでございますが……どうしてそのことを？」

泰江が軽く驚きながらも、答える。

柏樹山とは、柏樹市のちょうど北に位置する山である。秋には美しい紅葉が見られ、夏には、野野菜が多く採れる。また、それほど険しい山ではないため、運動のためにと、老齢の登山客が多く訪れる山だ。

ちなみに、式部家のほぼ直線上にあるため、晴れた日には、屋敷からでも山の全体が見ることが出来る。

「いや、昨日、邦英から聞いたのじゃ。泰江よ、悪いことは言わん、今あの山に行くのはやめておけ……嫌な予感がするんじゃ」

「嫌な……予感ですか？」

「そうじゃ」

天津は頷くと、柏樹山の方角を見据える。

今日のような天気だと、柏樹山がとてもよく拝むことができた。いつもの変わりない、なんの変哲もない風景である。

しかし、天津はその風景に言い知れぬ不安を感じていた。

「何故だかはわしにもわからん。ただ、感じるのじゃ、何か、とてつもなく禍々しい気配が……」

「そうなのですか……」

珍しく神妙な面持ちで話す天津に、泰江はただ頷くしかできない。心なしか、泰江の表情は、不安により、陰りを見せ始める。すると、それに気付いた天津は、

「まあ、ただの予感じゃからな。わしの思い過ごしかもしれん。怖がらせてしまつて悪かつたの」

言つと、先程の神妙とした面持ちから一転、いつもの飄々とした笑顔を見せる。

それにより、泰江も安心したのか、安堵の溜息を吐く。

「そうですね。……ですが、天狗様は嫌な予感がなさるんですね？」
「うむ」

「では、ここは天狗様のご忠告に従つて、今日は主人の世話でもしておきます」

泰江は、やんわりと微笑む。

「それでは天狗様。私はそろそろ失礼させて頂きます」
「そうか、では、邦英によろしく言つといてくれ」
「はい」

泰江は、恭しくお辞儀をすると、屋敷を出ていった。

泰江がいなくなった後、天津は再び柏樹山の方角に視線を向ける。

「そういえば、わしがあの山を離れ、早五百年、か。時間の流れとは早いものじゃのう」

天津は思い出す。

柏樹山にいた頃の自分を。

共に笑いあつた同胞たちのことを。

そして、【彼女】に出会つた時のことを。

「いかにいかに、昔を懐かしむなど、年を取り過ぎとる証拠ではないか」

自嘲気味に笑いながら、天津は首を横に振る。

こんなところを熾亜に見られれば、からかわれてしまうこと必至だ。いや、むしろ「千年も生きてる奴が何言つてんだか」と、呆れられるかもしれない。

「そういえば、この感覚、五百年前にも……」

天津は、この不安感を以前にも感じたことを思い出す。

「もしま、【アレ】が？ ……いや、そんなはずないじゃろう」

馬鹿馬鹿しい、と天津は自身の考えを自ら否定する。【アレ】は嚴重に封じ、もう二度と現れることはないのだ、と。

だが、天津から不安感が消えることはなかった。たとえ消えても、すぐにまた湯水の如く湧き出てくる。

「何も起こらねば良いのじゃが……」

その憂いを秘めた言葉は、誰にも聞かれることなく、夏の空に溶けていった。

4、懐かしの風

柏樹の街を、天津は一人、電柱の上から眺めていた。

時折、外で遊んでいる子供たちが自分を見つけ、手を振ると、こちらも手を振り返す。

出前途中の親父に調子はどうかと聞かれれば、上々、と答える。

何気ない、いつもの営みだ。

五百年の間に、いくら街並みが変わり、時代が進歩しようと、この人の営みは変わることはない。

(熾鶴よ、そういえば、お主はこの営みが何よりも好きじゃったな)

天津は、自分にこの営みを教えてくれた少女のことを懐かしむ。

式部熾鶴……五百年前、天津を式神にし、柏樹山から連れ出した張本人であり、天津の唯一無二の使役者だった人間の少女である。

そして、天津が唯一守ることができなかった人間の少女でもあった。

(よくよく考えれば、わしはお主に与えられてばかりじゃったのう)

熾鶴は、天津に様々なことを教え、与えてくれた。

しかし、天津は彼女に何も与えてやることはできなかった。

だからこそ、天津は彼女の意思を継ぎ、ここにいる。

天津にとって、これは自らの無力さにより死なせてしまった少女への償いであり、彼女を死なせてしまった自身への戒めなのだ。

だが、天津は知っている。

そのようなことを、熾鶴という少女が望んでいないことを。

たかが自分が死んだぐらいで、熾鶴が天津を恨まないことを。

それが式部熾鶴という少女であり、彼女を彼女たらしめる所以な

のだ。

(熾鶴、今のわしを見たら、お主はいったいどう思う?)

何をやっているのです、と目を尖らせて怒るだろうか?

それとも、もう自分を犠牲にするのはやめて、と涙を流すのだろうか?

あるいは、

「その両方かの」

泣きながら怒る熾鶴の姿が容易く想像できた。

自然に、天津の口元が綻ぶ。

今思えば、熾鶴が天津に向けた表情の中で、最も多かったのは、泣きながら怒る表情だった。

あまりに一人で突っ走っていた天津は、よく彼女に怒られていた。そして、天津は、どうすれば熾鶴が許してくれるか、いつも四苦八苦ししていた。

今となれば、どれもが懐かしい思い出である。

だが、熾鶴の事を思い出す度に、天津は自分自身の無力感に苛まれる。

「のう、熾鶴。わしは、あの頃よりも強くなつたじゃろうか?」

空を見上げ、呟いた天津の言葉に答える者は誰も、いない。

それでも天津は、空を見上げ続ける。

まるで、答えが返ってくるのを待つかのように。

どこからともなく、夕刻を知らせる鐘の音が、柏樹の街に響き渡る。

夏のこの時間帯では、まだ夕焼けを拝むことはできないが、太陽は既に傾いていた。

「ふむ、ちと物思いに耽り過ぎたか」

どうやら、久々に昔のことを思い出し、時間が過ぎるのを忘れてしまっていたようだ。

下を見ると、急いで家に帰る子供たちの姿がある。

それを見て、天津は、

「……そういえば、熾亜はどうしておるのかの？」

急に、式部家の次期当主が、今、何をしているのか気になった。

朝方に学校に出掛けたのだから、もう家に帰って修行でもしているのかもしれない。

「どれ、少し調べてみるか」

言っと、天津は目を閉じ、熾亜の靈気を探し始める。

「……………ん？」

熾亜の靈気は、すぐに捉えることができた。

熾亜は歴代の式部家の中でも、桁外れの霊力を持っている。そのため、そこから溢れ出る霊気を捉えることは、天津にとって容易なことだった。

しかし、

「……うゝむ、腕が鈍ったかのう？」

熾亜の霊気を捉えたにも関わらず、天津はそんなことを言い始めた。

無理もない。何故なら、熾亜は、天津が予想もしていなかった場所にいたのだから。

確認のため、天津はもう一度、熾亜の霊気を探る。今度は先程よりも集中して、確実にはずさないように。

「……熾亜、お主……」

再び熾亜の霊気を捉えた直後、天津はかなり残念な溜息を吐く。

天津が熾亜の霊気を捉えた場所は、彼女が通っている高校、私立水明高校である。そして、熾亜の霊気を二度も探り、熾亜が水明高校にいることは、純然たる事実だった。

つまり、

「まだ、補習が終わつたらんのか……」

そういうことである。

どうやら、今の今まで、ずっと補習を続けているようで、集中してみると、熾亜の霊気がかなり乱れているのがわかる。相当苦しんでいるようだ。

「まったく、一族屈指の才能があるというのに、頭が一族最弱とは

……神は二物を与えんというのは本当のようじゃな」

天津は、再び深い溜息を吐くと、水明高校の方角を見る。

「どれ、様子でも見に行くとするか」

そう言って、水明高校に向かおうとした天津だったが、

「お久しぶりです。天津様」

突如、一陣の風が吹き、後ろから声が聞こえ、動きを止める。

天津がゆっくりと、後ろを振り返ると、

「お主は……」

そこには、槌を背負った細身で緑髪の和服姿の青年が立っていた。

「かぜつちぼろ
風槌坊」

天津が呟いた直後、その青年　風槌坊は、にっこりと笑った。

4、懐かしの風（後書き）

なんとかできたよ第四話。

いやあ、新キャラも出せて満足です。

ちなみに、過去の人である熾鶴さん、今後もなにかと出てきます。

………ってか、ヒロインの出番が作れねえorz

あと、不定期更新なのは、単に私がサボっているからじゃありません！

………ほ、本当だよ！

5、風の目的

その昔、高名な鍛冶屋がいた。

その鍛冶屋は、死に際に全身全霊を尽くし、数本の槌を作り上げた。

鍛冶屋の魂が籠められた槌には、自然の理を操る不思議な力があつた。

しかし、人々はその力を恐れ、槌は使い手を得ることはなかった。やがて時が経ち、槌には魂が宿り、やがて妖となった。

自らが自らの使い手とならんがために。

妖となった槌の中で、最も早く妖となったのは、鍛冶屋が一番初めに完成させた槌だった。

その槌は、風を操る力を持ち、妖となった後、こゝろに乗るようになった。

風槌坊、と。

+++++

風が吹き、天津の髪を揺らす。

ただの風ではない、風槌坊の力によって操られた風だ。

渦巻く風が対象を覆い、対象が外へ出ようとすれば、瞬時に対象を切り刻む風の檻。

「久しぶりに会ったというのに、随分と手荒な挨拶じゃのう。なあ、風槌よ」

天津は、自身を閉じ込めている風の檻に同様もせず、目も前に立つ風槌坊を見やる。

すると、風槌坊はにっこりと笑い、

「お許しください。こうでもしないと、あなたはどこか入行ってしまつてしょうから」

そう答える。

「なんじゃ、わしはそんなに信用されておら」

「はい、その通りです」

「……………」

即答された。しかも、言い終わる前に。

「なあ、風槌よ。逃げぬから、この風を」

「解きません。それに、昔からあなたは、そう言つて何度も逃げていたではありませんか」

またしても言い終わる前に即答された。

しかし、天津はめげない。

「じゃから」

「却下です」

「……………」

「なんですか？」

「まだ何も言つとらんぞ」

「言われなくても分かります」

「……………」もういいわい

もう何を言っても無駄だ、天津はそう理解し、肩を落とす。

「まったく、五百年経っても、その生真面目な性格は健在のようじやのう」

「ええ、天津様も、そのいい加減な性格、お変わりないようですね」

天津が嫌味を言っても、風槌坊はにっこりと笑いながら、軽く避わす。

天津は、風槌に自分の一言一言に反応を見せる熾亜ぐらいの可愛げがあればいいのに、と思う。まあ、願うだけ無理だろうが。

「で、何故、お主がここにおるのじゃ？」

これ以上、こいつといっても面白くとも何ともない、という考えに至った天津は、さっさと風槌坊の用事を聞いて、とんずらすることを決める。

そんな天津の考えを知る由もない風槌坊は、

「寂しくて天津様に会いに来ました」

さらりと、そんなことを言い出した。

それに天津は、

「……………」

まるで、醜悪なモノでも見たかのように、顔を歪めた。

「天津様、冗談です。ですから、そんな顔しないでほしいのですが」

「冗談でも限度があるぞ。第一、わしにBLの気はないわい」

「びい……?」

風槌坊は、首を傾げる。どうやら、BLについての知識がないようだ。

当たり前だ。風槌坊を含め、柏樹山に住む妖は、柏樹山から出ることはまずない。よって、五百年間、人里で暮らしてきた天津に比べ、現代の知識が大いに不足している。

……といっても、天津もそっち系の知識は、つい最近になって知ったことである。まあ、天津としては、風槌坊になんと言われようと、教える気はさらさらない。というより、言葉にしたくない。

「天津様。その、びいなんとか、というのは、なんですか?」

「気にするでない。それより、さっさと目的を話さんか」

「……それもそうですね」

あまり興味がなかったのか、それとも、本来の目的が好奇心を上回ったのか、風槌坊は、簡単に納得した。

「では、率直に申し上げます」

風槌坊は、翡翠の瞳で天津を見据える。

「私は、天津様、あなたをお迎えに来ました。ご一緒に柏樹山へお戻りください」

「……風槌よ。もう冗談は」

「冗談ではありません」

「……そうか」

はつきりと答えた風槌坊を見て、天津は、彼が本気だと知る。しかし、それは天津にしては、あまりにも解せないことだった。

天津が柏樹山を離れ、既に五百年も経つ。その間、柏樹山は天津に対し、なんのアプローチもしてこなかった。

それなのに、五百年経って、いきなり戻ってこい、と言う。天津は、それが解せない。

「風槌、それは獅子丸の命か？」

だから、天津は問う。現山神である妖の名を出して。しかし、

「それは言えません」

「何故じゃ？」

「それも言えません」

風槌坊は、天津の問いに答える気がないのか、すべて首を横に振る。

埒が明かない。そう思った天津は、手っ取り早い方法を思いつく。

「では、お主が答えられることをすべて話せ」

すると、風槌坊は、少しばかり考える素振りを見せ、

「言えません」

はつきりと、そう答えた。

「しかし、これだけは言えます。例えあなたといえど、この命を拒むことは許されません」

風槌坊の言葉には、微かに殺気が混ざっていた。

つまり、

「拒むと言ったらどうなる？」

「力尽くでも連れ帰れ、と……」

言っと、風槌坊は背中中の槌に手を掛ける。

それに、天津は目を瞑り、

「……そうか」

小さく、本当に小さく呟き、

「では……」

一瞬で、自身を閉じ込めていた風の檻を吹き飛ばす。

そして、黒耀の瞳で風槌坊を見据え、

「かかってくるがよい。五百年ぶりに遊んでやるっ」

小さくほくそ笑んだ。

5、風の目的（後書き）

よし、連続更新。

予備設定として、天津のそっち系の知識は、そっちの道に両足を突っ込んだ柏樹市在住の女子高生らに面白半分であげられたそうです。

6、山神

「はあっ！」

風槌坊が勢いよく槌を振るう。

それにより生まれた無数の風刃が天津に襲い掛かる。

「おっと、危ないの」

天津は、放たれた風刃をすべて上空へと受け流す。

「ほれ、こつちじゃ」

そして、攻撃を受け流した天津は、風槌坊から距離をとるため、近くの電柱に移動する。

先程から、同じような攻防が何度も続いていた。

風槌坊は、どうして天津が反撃してこないのか疑問に思うが、あえて気に留めなかった。

何故なら、

「逃がしません！」

気に留める必要がなかったからだ。

風槌坊が再び槌を振るう。

その動作から、天津は再び身構える。

しかし、いくら待てども、風刃が放たれることはなかった。

失敗か？ 最初、天津はそう考えた。

すると、風槌坊は笑顔で、

「天津様。簡単に死なないでくださいね」

そう言った瞬間、

「っ！しまっ　！」

ドンッ

まるで巨大な鉄の塊と衝突した衝撃が天津を襲った。

身体は、風に飛ばされた紙きれのように、後ろに飛ばされる。

一瞬、意識が飛んだ。

すぐさま、意識を取り戻すが、

「よかった。まだ生きてますね」

「くっ」

その一瞬が、命取りとなった。

天津の眼前で、風槌坊がにつこりと笑いながら、大きく槌を振り、

ズドンッ

直接、天津に叩きつける。

「が、はっ……」

先程とは比較にならないほどの衝撃が天津を襲う。

ただ、あまりの痛みで意識が飛ばなかったのは、不幸中の幸いだ
った。

天津は、即座に体勢を整え、風槌坊との距離をとる。

「やはり、しぶといですね」

未だに動くことのできる天津を追いながら、風槌坊は率直な感想を口にする。

風槌坊が放った先の二撃。アレは確実に殺すつもりで放ったものだというのに、それで

死ななかったとは、正直ショックだ。

しかも、二撃目に関しては、ぎりぎりのところで避けられ、満足な手傷を負わせることができなかった。

「まあ、簡単に死なれては困りますからね」

そう言つて、目の前の天津を映す風槌坊の瞳には、微かな殺意が垣間見えた。

しばらくして、天津は急に立ち止まる。

「ここまでくれば大丈夫かの」

天津がそう言つたや否や、風槌坊も追い付いてきた。

「どうしました？ 追いかけてこは終わりですか？」

「いや、その必要がなくなっただけじゃ」

風槌坊の問いに、天津は、そう答える。

意味が理解できず、畏か何かを張られているのでは、と勘繰った

風槌坊は、辺りを警戒し、あることに気付く。

「……これはっ」

「ふむ、気付いたようじゃな」

「なるほど、そういうことですか」

風槌坊が気付いたこと……それは、周囲に人の気配が全くないということだった。それどころか、周囲は大量の木で囲まれ、肉眼では建造物も確認することができない。

「ここは十数年前に作られた森林公園でな。諸事情によって、夕刻になると門が閉められ、人がおらんくなるのじゃ」

してやったり、と言わんばかりの表情で天津は、喋る。

風槌坊は、天津が、ただ闇雲に逃げただけだと思っていた。だが、それは間違っていた。

天津は、人に危害が及ばない場所まで、風槌坊を誘導したのだ。それが、風槌坊には納得できなかった。

「天津様。どうして、あなたはそこまでこの街の人間の肩を持つのですか？」

「……何が言いたい？」

「間違っていると言いたいのです。元々人間と妖は、相容れぬ存在。この街の住民は、あなたを慕っているようですが、いつ手の平を返すか分かりません。だからこそ」

「早々に山に帰った方がわしのためになる、か」

「……はい」

風槌坊が言葉を紡ぎ終える前に、天津が言う。

確かに、風槌坊の言う通りであった。本来、一線を置くべき人と

妖の境界線を、天津は踏み躪っている。それがどれほど危険なことか、天津にも理解できている。

しかし、

「それは、できん相談じゃな」

「なっ！」

「わしは、式部の式神として、この街を守り続ける。そう、決めたのじゃ」

式部の式神として、その言葉が風槌坊にある確信を持たせる。

「なるほど、やはりあなたは、未だ式部に、いや、彼女に、式部熾鶴に捕らわれているのですね」

「……かも、しれぬな」

聞きたくなかった答えだった。

言っただけでなくなった言葉だった。

だが、これで分かった。

天津が【彼女】に相応しくないことが。

「分かりました。では、もう戻れとは言いません。代わりに……」

天津に、槌を向け、風槌坊は抑え込んできた殺意を解放する。

「あなたと、あなたを狂わした式部一族には、消えてもらいます」

「……どういう意味じゃ」

「言葉のままの意味です。【あの方】にとって、今のあなたと式部

は邪魔になった」

いぶかしむ天津に、風槌坊が笑顔で答える。

風槌坊は続ける。

「ですから、私はここであなたを消します。ご安心ください。式部の者は、私の兄弟が消しているはずですので」

【あの方】というのが、誰を指すのか、天津には分からなかった。しかし、風槌坊の言葉には違和感があった。

「風槌。お主、わしが山に戻ろうが戻るまいが、式部に危害を加えるつもりじゃったな？」

「はい。後顧の憂いは断つに限りますから」

風槌坊は、否定せずに答える。

そして、

「さて。もう、十分でしょう。では……」

風槌坊は、笑顔で槌を振り上げ、

「さようなら」

思いつきり振り下ろす。

瞬間、

「っー」

上空から大質量の風の塊が天津の立っている場所に落ちる。

ダウンバースト。

本来、一定の気象条件下で起こる現象であるが、風槌坊の場合、風を操ることで無理矢理、ダウンバーストを起こすことができた。

「終わりましたか」

土煙のせいで、天津がいた中心部は見えないが、見たところ、その周囲の土は抉れ、木々も無残に薙ぎ倒されている。

本物より多少威力は低いが、先程、天津を吹き飛ばした風圧の十数倍の威力だ。さすがの天津も、これで生きてはいまい。

「さて、火槌ひづちや金槌かなづちは、式部の者を始末できたでしょうか」

もう、ここに用はない。

天津がいた場所から背を向け、風槌坊は、式部一族の始末を任せた弟である火槌坊、そして金槌坊が、今どこにいるのか確認する。

「……どうやら、まだ片付いていないようですね」

二人の靈気を調べたところ、その近くには、まだ式部の者と思しき靈気が存在していた。

人間如きに何をやっているのか、と軽く落胆する。

「仕方ありません。手伝いに行つてやりますか」

ここから一番近いのは、

「火槌の方ですね」

確か、式部の後継者の始末に行かせたはずだ。
風の噂で、未熟者と聞いていたのだが、何故か火槌坊の方が苦戦している。

「本当に、何をやっているのやら」

さつさと向かって片づけてしまおう、そう思い、火槌坊はその場を後にしようとした。

その時、

「火槌、どこへ行く気じゃ？」

「っ！」

突然、後ろから聞こえるはずのない声でした。

すぐさま、火槌坊は振り返る。

そこには、

「ば、馬鹿な……」

「どうした？ 何を驚いておるんじゃ？」

無傷の天津が、平然と立っていた。

あまりの驚きで、声が出ない。

「ど、どうして……」

ようやく出せた声は、自分でも分かるほど震えていた。

「どうして？ ふむ、おかしい事を言う」

天津は顎に手を当て、考えるような仕草をすると、

「よもや、あの程度で我を殺したとも思っていたのか？」

その黒耀の瞳で、風槌坊を睨みつけた。

風槌坊は背筋が凍るような感覚に襲われる。

天津の言葉に押し潰されそうになる。

風槌坊は、悟る。

その言葉は、【式神】天津の言葉ではない。

それは間違いなく、

【山神】天津の言葉だった。

6、山神（後書き）

え、なんか長くなってどうしようと思いましたが、まあ、いいでしょう！（おい

最近忙しくて中々更新できませんが、週一単位で一、二話更新していきたいと思う所存であります、はい。

7、風は消え

風槌坊は、必死に身体の震えを止めようとする。

どうにか震えが収まったと思っても、目の前の天津を見ると、再び身体が震えだす。

できることならば、逃げ出したい。

すぐにでも、この場を離れ、その視界から天津を消し去りたい。しかし、それは叶わなかった。

蛇に睨まれた蛙の如く、風槌坊は、その場から動くことができなかった。

「風槌、兄弟を連れ、今すぐこの街から去れ」

「っ！」

「そうすれば、今回のお前たちの無礼、目を瞑ってやるっ」

まさに、地獄に垂らされた蜘蛛の糸。

風槌坊は、理性を総動員して、糸に縋ろうとする自分を抑え込む。そんなことできるわけがない。すれば、【彼女】を裏切ってしまう。

だが、風槌坊の本能は、天津の言葉に従おうとする。

今は、なんとか抑え込んでいるが、いずれ本能が理性を上回ってしまうっ。

「それは……できません」

だから、風槌坊は完全に屈服する前に、決着を着けることを決める。

震えた両腕で、しっかりと槌を握る。

ありったけの力を槌に注ぎ込む。

天津は、それを見て、

「……それが、お前の答えか」

言つと、天津は、腰から鉄扇を抜き、先端を風槌坊に向ける。そして、愁いを帯びた瞳で、風槌坊を見据え、

「来い」

その一言が合図となつた。

「はああああああっ!!」

風槌坊は、土を蹴り上げる。

天津との距離を一秒も経たずに縮めると、渾身の一撃を天津の頭部めがけて放つ。

「遅いぞ」

「っ!!」

天津は、風槌坊の一撃を、鉄扇でいとも容易く防いだ。

それは、風槌坊にとつて、とても信じられないことだった。

風槌坊は、歯を食いしばり、更なる一撃を加える。

「無駄だ」

再びその一撃は、鉄扇によって防がれる。

それでも風槌坊は、諦めない。

手、足、頭。

突き、払い、振り落とす。
風刃、風圧、竜巻。

その後も、風槌坊はあらゆる攻撃を、
あらゆる角度で、
あらゆる部位に、
最速の速さで繰り出す。

しかし、

「無駄だと言ったぞ」

天津は、それらすべてを防ぎ切る。

「そんな……馬鹿な……」

その事実には、風槌坊は絶句する。
強い、強すぎる。

そもそも、天津は式部家の式神に成り下がった時点で、山神の力は現山神の獅子丸に譲られ、失われたはずだった。
しかし、今の天津は、山神であった五百年前と同等の力を持っていた。

勝てない。

風槌坊の脳裏に敗北の二文字がよぎる。

（ふざけるな！）

風槌坊は、死を恐れた自分自身に怒りを覚える。

そして、その怒りは、人間の犬に成り下がった愚かな元山神に向

けられる。

その怒りが、今度は憎悪へと変わる。
憎悪は、風槌坊の心を染め上げた。

ヤツが憎い……あれだけの力を持つことが。

ヤツがニクイ……五百年前に山を捨てたことが。

ヤツがニクイ……【彼女】の気持ちを踏み躪ったことが。

憎い憎い憎い憎い憎いニクイ憎い憎い憎い憎い憎い憎いニクイ
ニクイ憎い憎い憎い憎い憎いニクイニクイニクイニクイニクイニクイ
クイ憎い憎いニクイニクイニクイニクイ憎いニクイニクイニクイ！

気が付けば、目と鼻の先に天津がいる。

天津は、鉄扇を風槌坊の額に当て、

「よせ、風槌。それ以上は、堕ちるぞ」

その言葉の意味が何を意味しているのか、風槌坊には理解できた。
だが、

「うる、さいー！」

もう、そんなことはどうでもよかった。

風槌坊は、槌を横に薙いだ。

天津は、鉄扇を盾にして、その攻撃を受け止める。
すると、

「なぜ、だ。なぜなんだ」

風槌坊が何かを呟き始めた。

「何故、あなたナノだ！ ナゼ、オマエなのだ！」

風槌坊が叫べば叫ぶほど、槌に籠められる霊力の量が増える。

「ナゼ【かの女】は、お前をエラんだンだ！」

「一体、何のことだ」

「オマエさえいなけれバ！ オマエサエ！」

霊力が更に槌へと籠められる。

「キエろ！ アマツ！」

「くっ！」

これ以上は、受け止めきれない。

天津は、即座に判断し、後ろへ飛び下がる。

「がああああアアアアアA A A A A A A A A A」

風槌坊の叫びが轟く。

いや、もはやそれは叫びではなく、獣の咆哮であった。

「……堕ちたか」

言っと、天津は鉄扇を広げ、

「墜ちたからには、もはや我の声も届くまい。せめてもの情けだ。
一瞬で消してやるっ」

そう、風槌坊に向かって言い放つ。

直後、風槌坊が動く。

「アアアアアアアアアアアア！」

正気を失った瞳で、

理性を失った咆哮を上げ、

膨大な霊力を籠めた槌で、天津に襲い掛かる。

片や、天津は、広げた鉄扇をゆくりと構え、風槌坊との距離が五メートルを切ったとき、横向きに力強く扇ぐ。

すると、突如、竜巻が巻き起こり、

「ガアアアアアアアアアア　　っ！」

一瞬で風槌坊を飲み込んだ。

そして、竜巻が消え去った時には、

「さらばだ。我が古き風の同胞よ」

風槌坊という存在は、この世から跡形もなく消えていた。

ここはどこだ？

何も見えない。

何も聞こえない。

自分が何者かも分からない。

私は誰だ？

一体、何者だ？

何故、徐々に身体感覚がなくなっていく？

何も分からない。

自分が消えていくのが分かる。

嫌だ。

消えたくない。

何も分からないまま消えたくない。

「さらばだ。我が古き風の同胞よ」

声が、聞こえた。

誰だ？

一体、誰の声だ？

分からない。

……ああそうだ。

一つだけ思い出せた。

私の名は
。

7、風は消え（後書き）

風槌坊戦決着です。

8、怒りの次期当主

天津が風槌坊を倒したちようど同じ頃、

「ちくしょおおおおお！」

水明高校のグラウンドに、火槌坊の暑苦しいほどの絶叫が響く。
風槌坊は、髪と同じ赤色の双眸に、怒りの炎を燃え上がらせながら、眼前に佇む少女、式部熾亜を射殺すように睨みつける。

一方、睨みつけられた熾亜は、

「なに？ 先に仕掛けたのはあんたなんだから、やられても文句ないでしょ」

臆することなく、睨み返した。

その瞳には、火槌坊と同等、いや、それ以上の怒りの炎が燃え上がっていた。
「当たり前だ。」

なにせ、ようやく補習地獄から解放され、覚束ない足取りで歩いていたところを、いきなり「式部！ 死ねえ！」という掛け声と共に突然襲い掛かってきた。

しかも、その時、火槌坊が繰り出した炎が運悪く熾亜の自転車に直撃。熾亜の帰宅の生命線である自転車は、跡形もなく焼失した。
それが熾亜の怒りに火をつけた。

最初、火槌坊の見たこともない攻撃法や奇襲により苦戦を強いられていたが、徐々に自身のペースを取り戻していき、先程、見事火槌坊の右腕を切り落とすことに成功した。

「人間のくせによくも俺様の腕を！ 殺してやる！ 骨も魂も燃や

し尽くしてやる！」

ちなみに、切り落とされた火槌坊の腕は、熾亜の呪符によって、粉々になるまで切り刻まれ、消滅した。

そのことが、火槌坊の怒りに拍車を掛けていた。だが、そんなことは熾亜にとってどうでもよかった。

「燃やす？　へえ……燃やせるものなら、燃やしてみなさいよ！」

言つと、手にした水の呪符を火槌坊に投げ放つ。

呪符は、熾亜の手から離れると水刃へと変化する。

水刃は、一直線に火槌坊へと向かう。

「同じ手が何度も通用するかああああ！」

水刃が届く前に、火槌坊が水刃に槌を叩きつける。

炎を纏った槌と水刃がぶつかり、その結果、

「なっ！」

「くっ！」

莫大な量の水蒸気が発生し、熾亜と火槌坊の視界を覆つ。

これでは、どこから攻撃がされるか分からない。

熾亜は、すぐさま、木の呪符を使い、水蒸気を吹き飛ばそうとするが、

「おらあ！」

「っ！」

その前に、火槌坊から仕掛けてくる。

幸いにも、何も考えずに真正面から突っ込んできてくれたおかげで、当たるとはなかった。

しかし、火槌坊の攻撃は、それだけで終わらない。

「おらおらおらおらあ！」

空振りしたと知るや否や、執拗なまでに槌を振り回し、熾亜を追撃する。

おかげで、熾亜は反撃できず、防戦一方となった。

そもそも、人ほどの大きさの槌を、片腕のみで難なく振るい続けるとは、

(馬鹿力にも程があるでしょ!?)

熾亜は、焦りながらも懐から紙きれを一枚取り出す。

呪符ではない。似ているが、全体は白、書かれている文字は黒と、呪符とは真逆になっている。

それは、【護符】と呼ばれる代物だった。

「はっ！」

熾亜は、【水】の文字が書かれた護符を眼前に掲げる。

霊力が籠められた護符は、形を失い、水気を帯びたドーム状の境界となって熾亜を覆う。

呪符が敵を葬る剣とするならば、護符は術者を守る盾。ちょっとやさつとの攻撃で破壊できるほど、やわなものではない。

これで、多少の時間稼ぎになる。

「しゃらくせえ！」

「うそっ!?!」

はずだったのだが、火槌坊の上段から振り落としにより、水の結界は、一撃で破壊されてしまった。

結界を破壊した火槌坊は、熾亜に止めの一撃を繰り出す。

「終わりだ」

火槌坊は、槌を振り上げ、言う。

その言葉に、熾亜は驚きのあまり目を見開く。

そして、

「……そうね」

口の形を歪ませ、笑みを浮かべた。

直後、

「がっ！」

突如、火槌坊の真下から石柱が出現する。

火槌坊は、空中へ弾き飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。すぐさま起き上がろうとする火槌坊だったが、

「動かない方がいいよ。さすがにその体勢じゃ、避けられないですよ」

それよりも早く、熾亜が呪符を突き付け、動きを封じる。

「てめえ、何しやがった」

「別に？　ただ、土の呪符をあらかじめ、あんたが突っ込んできそうな場所に配置しただけ。ま、ここまで簡単に引っ掛かってくれる

とは思わなかったけど」

「ふん、卑怯くせえことしやがって」

「いきなり奇襲してきたヤツに言われたかないわ!」

自分の事を棚に上げ、非難してくる火槌坊に、ついツツコミをいれながらも、熾亜は、「まあ、いいわ」と気を取り直す。

「それより、あなたの目的は何？ どうして私を襲ったの？ ってか、自転車弁償しろ、コラ」

呪符を突き付けながら、火槌坊の素性を聞き出そうとする。しかし、

「誰が言うか。馬鹿だろう、お前」

相手は、まったく喋る気ゼロ。しかも、喧嘩腰である。

だが、熾亜は諦めない。額に血管が浮き出ている気がしないでもないが、それでも諦めない。

相手が喋らない？

だったら、

(喋らせてやるまでよ)

所詮、相手は妖。人権なんて持ち合わせていない。

とどのつまり、

拷問しようが何しようが、自由！ 無問題！

というわけである。

まあ、表立ってそんなことをやれば、他の陰陽師や妖からバッシ

ングを受けること必至なのだが、

(バレなきゃいいのよ。バレなきゃ)

そう思いながら、くっくっくっ、と不敵に笑う熾亜の表情たるや、

「完全に悪役じゃの」

「へっ？」

突然、聞き慣れた声が、熾亜の耳に届く。

熾亜が声の聞こえた方向を見る。

その先には、

「あ、天津!？」

天津が呆れ果てた様子で熾亜たちを見ていた。

8、怒りの次期当主（後書き）

はい、言い訳コゝナゝが始まります。

1、先生！ 熾亜さんの性格が悪いです。つてか、怖いです。

A、ですね！

でも、これには訳があります。

考えてもみてください。

精神がボロボロになるまで働き（勉強し）、それがやっとこさ終わり、「さあ、帰ろう！」と意気揚々と仕事場（学校）を出た瞬間、自分の自転車（もしくは車）が大破、しかも目の前で。

……どう思います？

そりゃ、怒るでしょ。やったヤツ拷問したくもなるでしょ。

2、先生！ 天津の登場が早過ぎます！

A、……えっ？ あゝ、うん、早いね。

実際、彼と風槌坊さんが戦っていた場所と水明高校は、四〇五駅分ぐらいの距離があります。普通に考えたら早過ぎです。

ですが、彼は妖です。人間と比較してはいけません。人間の常識を当て嵌めてはいけません。

俗に言う【ご都合主義パワー】が働いたのです。

以上、言い訳コゝナゝ終わります。

ツッコミたいこと、言い訳して欲しいこと、もしくは、感想があれば待っています。どんどん言い訳しますんで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2539k/>

式神天狗

2011年10月6日20時05分発行